

巻頭言

劔物修先生のご退官によせて

小柳 仁*

日本循環制御医学会理事長、北海道大学大学院医学研究科侵襲制御医学講座教授劔物修先生は、平成15年春に定年退官を迎えられました。17年5ヶ月にわたる北海道大学でのご業績に深く敬意を捧げますと共に、通り一遍の賞賛ではすまない先生の足跡とお人柄について、20年以上お付き合いをいただいた同世代の人間として、本学会の発達史も踏まえながら感ずる所を述べさせていただきます。

3月21日の春分の日に行われる劔物教授の退任記念の会に出席すべく、全日空のシステムダウンによる8時間の待ち時間にも耐え、深夜札幌に到着しました。

翌朝、記念講演の始まる前の少時を利用して旧道庁の歴史展示室をのぞいてみました。北海道開拓史の一面を垣間見ることができ、その展示物の中には、石炭ストーブ、竹スキー、子供用のソリなどがありました。昭和初期の庶民の暮らしぶりをうかがう一端として、あるものはガラスケースの中に収められていました。これらの道具は、新潟生まれの小生が少年時代に日常使用していたものでもあります。50年という年月を経たとはいえ、少年時代に使用していたものが「歴史的遺物」「古民具」として歴史資料室に展示されていることに、自らの加齢はさておき、この半世紀で日本という国がいかにか激変したかを認識させられました。自らを変貌させることで、適応し生き延びて行くことは生物界では法則であり、これは、日本という国が百数十年前に開国して以来、自らの文化のいくつかをあきらめ捨てつつ、世界に適応して生き延びてきたことにも似ています。

勿論、変わらない部分は厳然として、主軸として残っています。私共の医学の世界ではどうでしょうか。変わるものと変わらざるものが共存しているのでしょうか。

今回、劔物先生と秘書の酒井さんのご助力で、この学会の創立当時のことを調べることができました。

循環制御医学会は、研究会として1980年（昭和55年）に創立されました。徳島大学麻酔科教授の齋藤隆雄先生が名実ともに発起人であります。そして、注目すべきは創立と同時に機関誌「循環制御」が創刊されていることであります。見識と実行力でしょう。初代編集委員（チャーターメンバー）は、敬意と共にその名を挙げさせていただくと、齋藤隆雄、山本道雄、劔物修、岡田和夫、高折益彦の諸先生であります。

第1巻第1号の「創刊の言葉」は、齋藤先生による5,000字の長文で、「限られた時間の中で循環機能を積極的に制御するという、循環器内科や心臓血管外科とは違った、ダイナミックな角度で循環を見直してみよう」という先生のポリシーが語られています。また、近い将来は学会にという先生の情熱も語られています。実際に、その6年後に学会に発展したことを考えると頭が下がります。

編集方針のすべてにわたり、今日の体裁がすでに企画されており、巻頭言、総説、原著、講座、誌上シンポジウム、座談会、研究会記録、症例、関連学会印象記、抄録、討論、質疑応答、ニュース、施設紹介、新著紹介、機器紹介、薬剤紹介、会告などの形式が整っています。齋藤先生は、燃えるような情熱と極めて精密な企画をもとに、この会を始められたことが今更ながらよく理解できます。

*東京女子医科大学名誉教授
聖路加国際病院ハートセンター

小生は、会が伸び悩んでいる時期に「循環制御」という言葉の難解さを説きましたが、今は自らの不明を恥じています。「制御」という言葉は今や先端医療の分野、また、大学院の講座名に数多く登場し、「積極医療」をよく表現しています。齋藤先生の執念と、劔物先生をはじめブレーンの方々により、この会は24回を迎えることになっています。「継続は力なり」であることを感ずる次第です。何時の世にも変わるべきものと変わってはいけないものが共存するものでありましょう。

卒後10年目くらいまでの外科医は、激しい研鑽の日々を過ごし、あふれんばかりの将来への希望と自己表現への欲求を持ちながらも、古い外科の体質を受け継ぐこの世界では、日本外科学会、日本胸部外科学会などへの若手の登場はなかなかかなわなかったものです。そこで、ハケ口を求めたのが、移植学会、人工臓器学会、集中治療医学会、救急医学会、麻酔科学会、そして循環制御医学会でありました。130年の外科学会の古い体質に比べ、新しい学問医療の分野は寛容で flexible でありました。麻酔科の先生のお仕事は、本質的に全体の coordinator、キラリと光る moderator であることから、寛容で flexible で気配りのできる方々が多かったのでしょう。それ故に、門外漢を受け入れていただいたのだと思います。

劔物先生におかれましては、札医、タフツ、旭川、北里、アイオワ、東邦、北大と続くご職歴が一見華麗にして、実は忍耐を強いられる creative なことが多く、それが先生の比類なき寛容さと積極性を醸成したのではないかと今更ながら納得しています。物事や人間への洞察力がその人の人生の深みを決めると思います。劔物先生は、医師として、指導者として、研究者として人一倍に仕事をされながら「人間力」も充分です。

私なりに最近感じていることは、「この年齢になって初めて気がついたり、理解できることがある」ということです。ここまで努力された先生は、これからまた新しい時を刻まれますが、さらに、多くのことに新しく気付かれ、人生の本当の妙味を味わわれることと思います。これまではほんの助走で、先生の人生はこれからです。

"Now is not the end.

It is not the beginning of the end,

But it is perhaps, the end of the beginning."

-Winston Churchill-

2003年春

東京・一番町にて

小柳 仁